
水俣病事件と「もうひとつのこの世」

萩原修子¹

半世紀以上を経て、なお終わらない水俣病事件。作家・石牟礼道子は、患者らの救済を求める運動に大きな影響力をもってきた。彼女による「もうひとつのこの世」という言葉を手がかりに、受難の超克と宗教のあり方を検討する。

¹ はぎはらしゅうこ：熊本学園大学商学部教授

はじめに

極端な言い方かもしれませんが、水俣を体験することによって、私たちがいままで知っていた宗教はすべて滅びたという感じを受けました（石牟礼2004：247）。

この言葉は、『苦海浄土』の著者・石牟礼道子によるものである。水俣病は1956年に公式確認されてから、すでに半世紀以上を経た。主に漁師であった初期の患者家族は原因不明の奇病として差別され、多くの命とあるべき人生、そして生業を奪われた。公害認定後も、裁判闘争に踏み切る患者家族は、加害企業の強い影響下にある地域社会において孤立を深めた。こうした受難の深さにおいて、石牟礼のいう「宗教」は救済とはならなかったのか。上記の言葉に、受難に寄り添ってきた石牟礼の深い失望がみてとれる。

一方で、水俣病事件をめぐる運動の中には、極めて宗教的な装いが見られるのも事実だ。たとえば、1970年、大阪のチツソ株主総会に出席した患者たちの白装束の巡礼姿や御詠歌。それに先立って、チツソ株主および大阪市民宛てに配られたビラには、「…人倫の道を求め、わが身はまだ成りきれぬ仏の身でございますが、それぞれの背に、死者たちの霊を相伴い、浄衣をまとい、かなわぬ体をもひきずって、のぼってまいります」（全集5：403）とある。

このビラを作成し、巡礼姿を構想したのも、石牟礼道子、その人である（全集別・渡辺：315）。ビラに見出されるのは、反公害や社会的正義などの近代的な理念ではない。地獄、死者、鎮魂、成仏といったことばに彩られた情念の中に、魂の救済こそが訴えられている。

こうした、ある意味で宗教的な特徴をもつ運動が結実する一つの形が、1995年に患者有志によって設立された「本願の会」であろう。後述するが、チツソや行政を敵として闘争するのではなく、患者有志が人間の罪や自身の罪を祈る会である。埋立地に野仏（魂石）を彫り、『魂うつれ』という季刊誌を出して、思想発信や独自の活動を行っている。石牟

礼道子もこの会の設立時からのメンバーである。

このように、水俣病をめぐる運動の思想的方向性において、石牟礼道子の影響は極めて大きなものである。なかでも、運動の歴史の折々に掲げられた「もうひとつのこの世」という言葉。この言葉も、石牟礼によるものであるが、患者自身や支援者に共有されるようになり、救済を模索する道のりの先に掲げられたものだった。

本テーマの趣旨に照らすと、水俣病事件における差別・排除は、一般に宗教によるものではないし、石牟礼が指摘するように、それを宗教が救済したわけでもない。しかしながら、その運動は、極めて宗教と近接しながら、差別や分断を超えるために、独自の救済の道を模索してきた。

石牟礼道子が、その道程に一定の影響を与えてきたとすれば、彼女の行動や発信する言説のなかに、差別や分断を超える救済の方向性が見出されるのではないか。本稿では、未曾有の受難の証人である彼女が掲げた「もうひとつのこの世」が示すものを手がかりに、「宗教」とどう交錯しつつ、今に至る道が開かれてきたのかを考察したい。

なお、主な資料は『石牟礼道子全集・不知火』（全17巻・別巻）に所収の随筆や講演、対談などである。煩雑さを避けるため、『石牟礼道子全集』（全17巻・別巻）の引用の表記は、（全集巻数：頁）としている。別巻は自伝と渡辺京二による詳伝年譜からなるが、渡辺による年譜の場合は、（全集別・渡辺：頁数）と表記している。

1. 支援組織と「もうひとつのこの世」

1.1 支援組織の創発

水俣病事件において、石牟礼道子の関わりは早くから際立っていた。すでに、市役所職員とともに患者家族に何度か会ううちに異常な事態に気づいていた石牟礼（全集別：247-250）は、1965年11月号から66年11月号まで、評論家で編集者の渡辺京二が刊行していた月刊誌「熊本風

土記」に『海と空のあいだに』というタイトルで計8回寄稿していた。それが1969年に『苦海浄土』として出版される(全集別・渡辺：310-312)。

さらに、公害認定後の補償交渉において孤立する訴訟派患者家族29世帯の支援に乗り出していた。石牟礼によれば、「どんなふうに水俣病を表に出したらいいのかと悶々と考えている時期が十年近くありました。戦後民主主義は結局根なし草的な進歩主義ですし、既成の左翼は人間をいかに見てないか、ということが骨のずいまでわかった経験をしてもおりました」(全集5：431)。その結果、「やっぱり今まで日本になかったような集団—組織という言葉は嫌いです—を作らねばならん」(全集5：324)として、支援組織2つの設立に動く。

一つは水俣における患者支援の軸となる「水俣病市民対策会議」(のちに「水俣病市民会議」と改称、会長：日吉フミ子)、もう一つは、水俣病裁判闘争を全国に発信し支援する組織として、熊本市内に事務局が置かれた「水俣病を告発する会」(会長：本田啓吉)である。

渡辺京二によれば、「彼女なしには熊本市に支援運動が起こることはなかった」し、「『告発する会』が患者と『市民会議』の信頼を得ることも難しかった」(全集別・渡辺：313)。

機関紙『告発』が強い訴求力を持ったのも、彼女の文章ゆえである。……むろん『苦海浄土』も含めて、彼女の文章の力こそ、このあと日本各地に「告発する会」が生まれる原動力であった。熊本の「告発する会」が活動の根本精神としたのは、『苦海浄土』に表現された彼女の思いだった。それなしには会代表をつとめた本田啓吉の有名な言葉、「義によって助太刀致す」も生れなかった(全集別・渡辺：313)。

特に、「告発する会」の運動の中で生みだされ、共有されたのが、この「もうひとつのこの世」というイメージである。それは強烈なインスピレーションとなって運動を突き動かしていく(渡辺2013：126)。このイメージの意味する内容とは何か。そして、それが運動をいかに導い

ていったのか。

1.2 「もうひとつのこの世」と「告発する会」

このことばの初出¹⁾は、「水俣病を告発する会」の機関紙『告発』²⁾である。

私のゆきたいところはどこか。

この世ではなく、あの世でもなく、まして前世でもなく、もうひとつの、この世である。逃亡を許されなかった魂たちの呻吟するところにむかって…(中略)

生きながらこの世の外のものとならされたものたちは、決して市民権などうることはない。この世の外、もうひとつの世の中へゆく道はどこか。……

全文は文学的で解釈は難解だが、「もうひとつのこの世」とは、この世でも、あの世でもなく、前世でもなく、この世から切り捨てられた呻吟する魂たちもともに生きられる世界、と考えられる。これが運動においてどのように共有されていたのか。

渡辺によれば、そもそも水俣病闘争とは、「銭は一銭もいらん。会社のえらか順から、死人の数だけ有機水銀ば飲んでくれれば、それでよか」(渡辺 2000 : 78) という、チッソとの交渉の中で患者から出された有名な言葉にあるように、補償が究極の目的ではない。水銀汚染による被害補償という形態をとってはいるが、「彼らはこの世に人間的道理が行われることを求めた」のである(渡辺 2000 : 76)。人間的道理とは、端的に言えば、相手に損害を与えたら、何をおいても心から詫びるということである。水俣病発生以来、加害者チッソの対応は、彼らの知っている人間的道理にいちじるしく違反した。経済とか社会とか政治とかいう上部構造に移れば、なぜ人間的道理がかなわないのか。公権力たる裁判所にその回復を求めたが、彼らが求めているものはそこでは得られない。彼らが求め、表現したいもの、それが石牟礼道子の「もうひとつの

この世」の言葉の指示するものにはかならないという（渡辺 2000：76-78）。

そうした患者に、「義によって助太刀致す」というスローガンで応えたのが、「水俣病を告発する会」である。支援という言葉を好まず、他人事に徹底して同情を貫く同行者集団である。渡辺は、『もうひとつのこの世』、もしそういうものがあれば、われわれは患者・家族とともに、幻なりと垣間見たいと思っている」（渡辺 2000：84）という。

このように理念として掲げられた「もうひとつのこの世」は、人間的道理が回復される世界、我が事ならず他人事に徹底して付き合う世界である。しかし、それは、たんに懐古的な「前近代的」村落共同体の回復ではない。渡辺が指摘しているように、村落共同体は、そもそも患者を出した家を差別し、相互扶助の生活規範を適用しない、容易に解体される性質のものだった（渡辺 2000：79）。とすれば、希求される「もうひとつのこの世」は、かつて存在した世界ではなく、「だれも見たものがないゆえにだれも説くことはできない」（渡辺 2000：78）、いわば現実と幻の間で幻視されるものであると理解される。

それでも、その世界を希求した運動の一つの帰結が、現在の一般財団法人「水俣病センター相思社」だ。裁判闘争中に、孤立した患者がその後も生活の拠点をもちうるように構想されたものである。具体的には、「チッソの城下町」で、公然と声をあげることは難しい患者たちに血のかよった医療を提供し、水俣病の真実を医学的、社会的に明らかにし、共同作業場、生活の糧をつくっていこうというものである。

「患者・家族たちに親しい支援者たちの中にも、患者・家族たちのもっとも人間的な姿に触発されて、彼らとともに、支えつつ、支えられつつ、『もう一つのこの世』³⁾をつくりたい」とは、たしかに遠大な夢ではある。しかし、「高度成長を誇る日本の経済社会、あるいは現代文明そのものの犯しつつある人間破壊にあらがいがながら、私たちみずから、もう一つの異った人間的な連帯の原理と現実を求めて試みることは、あるいは途方もない結実を、この現世にもたらすことになるかも知れません」⁴⁾というように、あるべき世界の一つの形が「水俣病センター相思

社」なのである。

こうして1974年に設立された「水俣病センター相思社」だが、運営における現実的な多くの困難にぶつかる。紙数の都合で詳細は述べないが、結果、初期の構想からは紆余曲折、変化を余儀なくされた（水俣病センター相思社：2004）。それでも、今にいたるまで、被害者支援の姿勢を核にして、研究調査の推進、相談事業やまち案内、水俣学習の手伝いなど、活発な活動を行っている。

2. 玄郷としての「もうひとつのこの世」

闘争において共有されていた「もうひとつのこの世」の意味するところを検討してきたが、そもそもこの言葉は、作家・石牟礼道子にとってどのようなものとして構想されているのか。結論を先取りすれば、それは彼女の「玄郷」や「浄土」という語と重なっている。渡辺京二は、石牟礼文学の特質のひとつとして、「もうひとつのこの世」を次のように説明している。

現にこの世にある世俗的な生活の彼方に、その始原ないし根元をなす隠れた存在の次元があって、その次元から絶えず呼び返されているといったふうに、人間の生のありかたをとらえる感覚です。その隠れた存在の次元は、近代化以前、工業化文明以前の、さらに言えば文字文化以前の、土を耕し、海の生きものをすなどり、牛や馬を追う、山河と密着した生活のありかたの中で常に感知されていたもので、それなしには農民としての、あるいは漁民・牧畜民として現世の世俗生活も、存続の根底を失うような、「もうひとつのこの世」だったのです（渡辺2013：198）。

まさに、石牟礼文学にある、様々な生類と密着した生のあり方、生類が賑わっている世界を指している。渡辺は、それがもっとも明瞭に描かれているという長編小説『天湖』を引きながら、「もうひとつのこの世」

とは、絶えず生成をくり返している原初の風景で、隠れてありながら常時顕現する「この世」のもうひとつの相のことで、「この世」と平行しつつ、「この世」の存在を根底から支えているものとする（渡辺 2013：212-213）。

さらに、そこは登場人物が語る「出来そこないのわたしも居ってよかところ」（渡辺 2013：212）だ。石牟礼でもある「わたし」が立っている場所は、患者の場所と重なるところにある。「石牟礼氏が患者とその家族たちとともに立っている場所は、この世の生存の構造とどうしても適合することのできなくなった人間、いわば人外の境に追放された人間の領域」（渡辺 2000：146）である。

私はもの心ついたころから現世は苦海だと思っている人たちの中にいるという気持ちのございまして……、（中略）まあ、水俣のことを体験しなくても、生きている感じを申せばやはり、われ、ひと共にみな苦海にいるという感じがしております（全集 3：565）。

苦海に沈む石牟礼も、患者も、そうであればこそ、夢をみる。「水俣の被害者たちは悲惨な姿もしておられますけれども、そういう人たちだけが浄土を夢みることができるというか、浄土を思い浮かべることができると思うんですね……」（全集 3：565）。

これらは 1988 年に仏教学者・中村了権との対談で語られていた。石牟礼のいう浄土はたとえば、「口笛一つで風を呼んで、海も空も広々と開けて、光り輝く海の上で魚の群の中に入って行く……」（全集 3：566）そういう広やかな海の上で心が晴ればれとする楽しさ、人と自然、生き物が繋がりあい交感しているような体験である。それは、水俣病患者でのちに語り部となった漁師・杉本栄子らの心の中に克明にあった楽園であり、「いちばんもとの“玄郷”の体験」（全集 3：566）である。それが、水俣病が発生して失われてしまった。「ですから、人々に未来があるとすれば、それは玄郷の世界を思い浮かべる、ということにある」（全集 3：566）のだ。玄郷を体験する基盤が失われた今、それを想起す

ることのみが未来をつくるということであろう。

以上から、裁判闘争において共有されていた「もうひとつのこの世」と、石牟礼が構想するそれとの微妙な違いが見出されることは明らかであろう。闘争において強調されていたのは、裁判では回復されない人間的道理であるのに対し、石牟礼や患者の幻視する世界は、人間的道理を含めて、その基盤である自然を含む生類全体の交感する世界なのであった。

闘争において表現されえなかった人間的道理の基盤、この世の根元を希求する後者の世界は、その後、「玄郷の体験」をもった患者たちによって担われることになる。

3. 石牟礼道子と「宗教」

3.1 本来の「宗教」

冒頭に紹介したように、石牟礼のいう「宗教」への態度は、厳しい。「日本には、まあ仏教がございましたけれども、その宗教的な集団は、水俣病に関してはカンパをいただいたりとか、中には戦いの戦列の中にはいつてきてくださった方もいらっしゃいましたけれども、本当に患者さんの魂に添うようにして宗教者が全面的に働いたことは、まあ残念ながらなかったと思うんです」(全集3:546)。実際、「市民会議」を立ち上げる際、「宗教家、お医者さんにも呼びかけました。……宗教家はひとりもはいつてこない」(全集5:325)。

彼女が、ここで用いている「宗教」は既成の宗教集団のことを指していて、既成の宗教は、水俣病事件においては、ほとんど関与しなかったと批判的である⁵⁾。

しかしながら、石牟礼が宗教に関わりがないかと言えば、もちろんそうではない⁶⁾。1972年のインタビューで「著書やチツソの告発に仏教的な色彩が認められますね」という問いに、次のように答えている。

仏教というより、原始仏教、あるいは本来の宗教といった方が妥当でしょう。仏教はいま大変頹廃しております。とくに教義だけをいうものは。まだ教義など、できない段階、たとえば、火を見ればこれは神様だ、こんなふうに、太陽、水、海、魚……自然のあらゆるものに神様を認めるといった、形の整っていない最も原理的な意味での宗教社会を、水俣の人たちは見ているんですね。既成宗教がだめになって行けばいくほど、原理的なものに回帰しようとするわけです（全集3：497）。

また、『アニマの鳥』⁷⁾という小説に言及して、「既成教団の力の衰えが宗教心の衰えにつながり、宗教そのものが、生きていたとはいえない現代からアニミズムや八百万の神々というものを見つめ直してみたい」（全集11：196）と言っているように、いまだ形をとらない原理的なもの、生成していくものにこそ価値を置いている。さらに、「真に宗教的なもの—これからのあなたご自身について」というインタビューにおいて、次のように語っている。

不思議でならないのは、なぜキリストは物語に組まれたとき、馬小屋で生まれても、その誕生を予言する東方の聖者たちが現われて、最初から権威を付与されるのかと思うんです。（中略）まあ人間の持ち得た一番精神の高貴なものを付与されていた人間には違いないと思うんですが、それが記録される段階になると、どうしてあのように権威づけられるのかと、不思議でならないんです。そういうものを取ってしまったならば、そもそも元はどういう人間たちであつたろうかとも思うんです。権威づけられない聖者はどうしてあり得ないか。そうでない聖者は無数にいたと思うし、いまもいると思うんです。それはやはり、最下層の、汚濁にまみれて、一切の受難を背負った人間であつたろうにと、あり続けたろうにと思うんです。権威づけられず、何の恩恵にも浴さない、いつも無名で生き続けてきた最下層の人間たち、それでもなお世の中にある力を持ち続

けて、評価されることのない、そういう力こそが、人類をほんとうは生き変わらせてきた力だと思います（全集3：501）。

権威づけられてしまって既成宗教になっているものは、当初「人間の持ち得た一番精神の高貴なものを付与されていた人間」であったとしても、人類を生き変わらせられない。その力をもっているのは、権威づけられない多くの最下層の無名の聖者である、ということだ。

このように、石牟礼が批判するのは、世界を甦らせない宗教、人類を生き変わらせない宗教である。世界を甦らせたい、生き変わらせたい、と願う民衆の力にこそ、石牟礼の期待する本来の宗教の力があると言える。闘争において、石牟礼の構想した白装束の巡礼団となった患者たちの姿は、そのような民衆の力の噴出でもあった。こうした、世界を生き変わらせたいと望む力の噴出は、これで終わりではなかった。

3.2 すべては命である

「宗教はお持ちですか？」という質問に、石牟礼は「別に何宗というのはないですよ。ヨーロッパのものも東洋のものも、日本のものも何宗ってないけれど、『すべては命である』という気はしますね」（石牟礼2007：145）という。著書などで使われる言葉が仏教に偏っているのは、ただ生まれた時から周りにあっただけ、と説明する。

すべては命であること、それは、見てきたように石牟礼文学における玄郷としての「もうひとつのこの世」に色濃くあらわれている命の賑わう世界である。その世界は、より具体的に、彼女の頻用する「悶え神」「煩惱」で、以下のように表現される。

「悶え神」は、自分や、人間のみならず、牛・馬・犬・猫・狐・狸の世界や、目に見えぬ精霊たちの世界のこと、天変地異、つまりはこの世の無常の一切について、悶え悲しむばかりの神として在る資質で、無力なだけの存在であるという含みがある。救いなどない無力の極みにせめてともに悶えて加勢するのである（石牟礼2004：130-131）。

石牟礼にとってのこうした「神」は感受性豊かな隣人を通して現れる。

「上古の時代だけでなく、ついこの三、四十年くらい前まで、わたしのまわりに確実に遺存していた自然人というか、自然神の感受性ともいうべきもの」(石牟礼2004:130)である。ほかに、〈喜び神さま〉(唄神さま)あるいは〈踊り神さま〉とよばれる人がいた(石牟礼2004:130)。

また、興味深いのは、日本民話でよくある話型の「貧者が善根によって富貴になる」ことについての石牟礼の所感である。「それはしかし、わたしにはしっくりこない。自他ともに救われぬ悶え神というのが、たたずんでいるのが本当という気がする」(石牟礼2004:132)。つまり、超越的な何かから一気によき場所に引き上げられるような「救い」はなく、無力の極限にあるものがともに佇む、悶えていることのみがせめてもの救いの形、ということだ。

さらに、「悶え神」の内面ともいうべき「煩惱」についてのとらえ方も興味深い。仏教的に克服すべきものとして否定的に捉える考えとは異なっている。石牟礼の地域において「情愛の濃さを一方的に注いでいる状態、全身的に包んでいて、相手に負担をかけさせない慈愛のようなもの、それを注ぐ心の核になっていて、その人自身を生かしているものを煩惱というのです」。これは人間のみならず、木や花や犬や猫にも同様だ(石牟礼1995:145)。

このように、生類が情愛を交わし合う世界について、岩岡中正の指摘するように、「……石牟礼にはキリスト教をはじめとする、人格神による創造や救済の思想はない」。しかし、だからといって、「石牟礼の救済は、万物の靈魂とともに安らぐというアニミズムのそれでもない」(岩岡2016:14)。一見、アニミズムとも思われるが、それと同じではない。岩岡は、これを「石牟礼の救済は、たしかに神でも万霊でも私個人によるものでもなく、どこまでも『私たち』によるのである」(岩岡2016:15)とする。

生類、万物の靈魂に安らぐのではない「私たちによる救済」とは何か。それを体現しているのが、以下にみる「本願の会」であるといえる。

4. 宗教・倫理・救済

4.1 「本願の会」と「もうひとつのこの世」

水俣病闘争は、90年代の「もやい直し」環境再生事業、政府解決策の実施とともに、幕引きがなされようとしていた。

「もう終わった終わったと言われている中で、どうやってこの思いを残そうか」(全集15:570)。こうした思いを抱えた石牟礼と親しい患者たちを中心になって、1995年に「本願の会」を設立する。「企業も政府も引き受けなければ、その罪の結果を、あらためて自分らが引き取る。そのことによって躰は死んでも、魂は決して死なない」(全集15:359)という宣言である。

文案は患者で漁師の緒方正人による。彼は父を水俣病で殺された憎しみから裁判闘争の先鋒にたっていたが、その闘いの中で、ある境地に至る。彼の著書である『チッソは私であった』のタイトルにあるように、チッソを生み出し、その恩恵を享受する近代社会の一部として自らを捉え直し⁸⁾、加害・被害を超えて、近代に生きる私たちに生類、命のつながりあう世界に戻ろうと呼びかける。

会員の杉本栄子も漁師で、差別や病苦の激しい受難の末に、水俣病を「のさり」(天からの賜物の意)と引き受け、自らの罪を祈り、チッソも行政もゆるす境地に至る⁹⁾。彼らは埋立地に魂石を彫って、後世にその思いを伝えようとしている。

彼らの運動にこそ、石牟礼は裁判闘争以来の患者運動の魅りをみていた¹⁰⁾。彼ら自身、当時の闘争の先頭に立っていた患者たちでもあり、20年あまりを経て、たどりついた思想が、この「命、魂」のつながりあう世界へのよびかけであること。それは、まさに、闘争において欠けていた、いまだ表現しえなかった人間的道理の基盤であった。この世界をつくる根元にかえる、「玄郷としてのもうひとつのこの世」への希求において、石牟礼と患者たちは深く共鳴し合っている。

彼らのこうした活動について、「『本願の会』は闘いを忘れたのか、魂

のなんのと云い出して、宗教くさい」という声（全集15：472）が聞こえてくるようだ。しかし、現会長の緒方正人も「宗教ではない」と断じる。その活動が何をもって、「宗教」とは一線を画すのかについては、別に論じたことがある¹¹⁾が、石牟礼のいうように、「『本願の会』は、宗教団体ではありませんけれども、著しく根源的な意味で、宗教的な意味でもラジカルに事を考えて行いつつある」（全集17：567）集団である。その意味は、裁判闘争の際の巡礼団の姿で示されたような、「世界を甦らせる」「人間を生き変わらせる」民衆の力、石牟礼のいう本来の宗教の力が見出せる集団ということであろう。では、彼らは何をもって、そう言えるのか。

石牟礼は水俣病闘争初期において、「水俣病を告発する会」に言及しつつ「道行」という文章（全集4：524）を書いている。「いのちのきわみに道行のえにしを、結びたがっている人びとの群」にみえる会の人びとのあり方は、「連帯」とは異なる関係の結び方である。岩岡中正によれば、「患者へのたんなる共感や団結を超えて先ず自分が『徹底的に孤立』することにはじまり、『一人でもあの世にいかねばならない』と思っ合っている者同士が、そこに絆を結ぶ』形のものである」（岩岡2016：89）。

石牟礼が水俣病と向き合う際の覚悟、周囲に関わりを呼びかける覚悟は「道行」であった。宇井純との対談で「今まで属していたものはそのままに、まったくたったひとりででも水俣病を背負う覚悟がなければ。水俣病は、ひとりで背負い切れるものではないんですけど、まず基本のところでは、そういう自己への問いみたいなものをやった人間だけでしか、水俣病に向い合う集団というのは作れない。だからそういう人間を探していたわけです」（全集5：324）。

こうした厳しい孤独のうちに、「……、心の底で私は『一人であることを覚悟せよ。これは容易ならぬことをおっはじめたぞ。一人であることを再々覚悟せよ』と自分に言い聞かせていた」（全集別：300）。そして、「まかり間違ってもたわやすく連帯などとはいうまい。支援するなどと恥の上塗りをいうまい、と自分をいましめています」（全集7：

552)。

石牟礼は、このように支援や連帯や組織にまつわるあらゆるものにかめとられず、一人で背負う、一人で闘うことを貫いている。

これは、「本願の会」の会員それぞれの志と通じている。患者の緒方正人も杉本栄子らも孤独に闘う。会のメンバーたちは、「たとえ一人になっても、やり抜くとばい」と呟く。その傍らで、石牟礼は病と闘う患者たちの「その症状との過酷な、孤独もきわまる闘いの内容に私などには入れない。ただ衿を正すばかりである」(全集15:508)という。それぞれの立場で、それぞれが一人で背負うものである以上、そこに石牟礼が忌避する権威づけや組織化は生まれようがない。常に求め、問い続ける生成の中に自らを置いている。そうした意味で、石牟礼のいう「宗教的な意味でもラジカル」であり、「本来の宗教」と重なるのだろう。

だからこそ、「本願の会」は石牟礼にとって、大きな意味をもつ。これまでの運動とは異なって、彼女はそこにある種の希望を見出している。

現代には神というものはなくなったですよね。水俣の患者さんたちも目に見える形で確かにここに神様がいらっしゃるというふうには思っていないと思うんですが、やっぱりあの方々は現代に復活しつつある神仏であろうと、私は密かに思っております。だから私にとってあの方々は、……心の灯火といえますか、お導きいただいていると私は思っております(全集17:570)。

本稿の冒頭で紹介した言葉「宗教は滅びた」のあとに続くのは、この希望であった。

宗教を興してきた人々はつねにその受難とひき替えに宗教を興してきたわけでしょうが、もし二十一世紀以後があり得るとすれば、水俣の人々が体験した受難は、次の世紀へのメッセージを秘めた宗教的な縦糸の一つになるかもしれません」(石牟礼2004:247)。

こうした希望は、「連帯」の語を嫌っていた彼女が、「本願の会」を指して、「残余の生を、弱者たちの奈落の連帯に、寄り添いたいと願っています」(全集17:495)と、「連帯」を用いていることにも表れている。孤独に闘いつづける石牟礼が見出す「本願の会」という「弱者の奈落の連帯」は、「道行」というある孤独の極限を超えて、ともに世界を甦らせる可能性を秘めた希望なのではないか。

4.2 宗教と倫理

これまで見てきたように、石牟礼の思想は、生類を含む人間と人間の関係における道理、倫理を志向している。彼女は、無名の民衆における世界、一切の生類とともに生き、それらに神を見だし、隣人に神を見だしながら、煩惱という豊かな深い情愛を交わしあいながら生きる人間的な世界こそを肯定している。

では、いかにして、石牟礼のいう救済は実現されるのか。2013年に救済について語る「本願の会」での対談で、緒方は制度的な認定を放棄した理由を、「自然界に愛されているという実感を感じたから」という。そして、「自然界の中に生かされて生きているという双方向の応答する関係。……そこで存在の実存感を感じるということが一番の救済だと思う」¹²⁾と語る。

緒方や杉本らが受難を超克したのは、端的にいえば、こうした自然とのつながりにおいて、自らを再発見したからである。そういう彼らを、石牟礼は次のように表現する。

患者さんたちが考える自分というのは、近代的な個とか自我よりもっと深いような気がします。……理屈じゃなしに自分というものを、ご先祖様が宿っている連続した生命体として感じておられるんですね。連続する生命というのは人間だけじゃなくて、魚もそうだし、草木も土地もそうだし水もそうでしょう。それを魂というふうに表示なさいます(全集14:501-502)。

魂とは、先祖や生類、石も含めてすべて連続する命のことであり、それらのうちに自己を見出したこと。それが救いとなったのである。

これを、漁民部落の真摯な調査によって、すでに1980年代に捉えていたのは、宗像巖であった。彼は、石牟礼によって招聘された不知火海総合学術調査団¹³⁾の一員で、人間と自然の連続した豊かな関係、すなわち石牟礼のいう生類の交感する世界に受難の復元力を見出していた。それを宗像は「見えない宗教世界」と呼び、そこにおいて人々が持っていた潜在的倫理感が表出することで、危機的状况を乗り越える、と論じていた¹⁴⁾。

緒方らはまさに、受難の限りを尽くして、「見えない宗教世界」のうちにすでにある救済、自然に愛されていること、自然と人間のつながりの中に自らを見出した。そこから初めて、「加害・被害を超えて、人間の罪を祈る、もとの命にかえろう」と人間と自然、人間と人間の間を築きなおす倫理が自らのうちに生起したと考えられる。それが、石牟礼のいう人間を生き変わらせる、世界を甦らせる力の発現であろう。

受難の超克について、「ユダヤ人は完全に神に見捨てられるという例外的経験を持ちました」(レヴィナス 2008: 30) と述べるのは、ユダヤ教徒で哲学者のエマニュエル・レヴィナスである。ここで、石牟礼にはない創造や救済の人格神の宗教であるユダヤ教をとりあげるの唐突かもしれない。しかし、ナチスによる未曾有の受難を経てなお、ユダヤ教徒であり続け、ユダヤ的一神教の独自性について語るレヴィナスにおいて示されるのは、同様に、倫理を起動するものとしての宗教である。

ユダヤ教について、キリスト教のイメージと連続してとらえがちであるが、レヴィナスが説明するユダヤ的一神教は、聖なる神が奇跡をおこして人間を救済するといった一般的なイメージと共通するものではない。聖なるもの、神秘的なものは人間の自由を損なうものとして排され、さらに、神はすべてを赦す神ではなく、人間に代わってその義務や責任を引き受けることはできない。神が人間をすべて赦したら、その世界は非人間的な世界、モラルのない世界になるからである。人間は人間との関係を通して、そこで他者への責任を引き受ける主体が他者とつく

る倫理的な関係を通して、神に接触することが可能となる（レヴィナス 2008：30-45）。一見、無神論的といえるほどであるが、それを超え、他者との倫理的関係を築くことを通じて、神に近づくことが目指されるのである（レヴィナス 2008：37）。「倫理的命令とはここに神を迎えることではなく、神へ向けて進んで行くことなのです」（傍点は筆者）（レヴィナス 2008：172）。

石牟礼らの歩みを振り返ると、「既成の宗教は救ってくれなかった」し、「絶対者の声に促され、神秘的な啓示を語り、預言者的な行動をする者は現れてはいない」（宗像 1983：191）と宗像もいうように、神秘的な超越的存在を迎えることもなかった。だからこそ、石牟礼をはじめ、多くの人々が、他者への責任や事件への責任を孤高に引き受け、ともに「悶え」ながら、心を通い合わせる倫理的世界を模索してきたと言えるのではないか。それが、岩岡のいうアニミズムに安らぐのではない、「私たちによる救い」であろう。石牟礼は次のように言う。

救いはないんです。だから、人さまに救ってもらうんじゃなくて、自分たちで自分たちの魂を、まず救済する。まず自分が、孤独な自分がどうやったら救われるか、ですよ。それはなんというか、まず自分が人間になりなすという作業かもしれません（全集 16：692）。

こうしてみると、人格神による普遍宗教であれ、石牟礼らの根底にある「見えない宗教世界」であれ、そこに人々が、救済を待つのではなく、それに向けて進んで行くこと。すなわち、他者への責任や事件への責任をそれぞれひとりで問い、引き受ける主体が、救済に向けて進んでいくこと、権威づけや組織化を忌避する、その果てなき運動がこの世界に「人間になりなす」という倫理を生起させ、それが差別や排除を超える力となってきたのではないか。

おわりに

石牟礼がなぜ既成の宗教に失望していたか。当時、そこには、水俣病の苦患に満ちた世界を甦らせるための倫理の生起が見出されなかったからだろう。世界を甦らせるものは、石牟礼の見る既成の宗教の中にはなく、水俣の闘争の中で民衆が救いを求めてきた力にあった。その力が差別や排除に立ち向かうものであり、その形は民衆の「見えない宗教世界」から立ち現れたため、宗教的な装いをもっていたのであった。

あらためて「もうひとつのこの世」とは、この「見えない宗教世界」に基盤をもち、「玄郷」として、現実と幻の間で個々に想起される世界である。水俣病闘争・支援運動においては、この言葉が、石牟礼や患者の基盤である「見えない宗教世界」を共有しない、全国の支援者らにも訴求力をもった。「水俣病を告発する会」で具体化された「義によって助太刀致す」という表現は、水俣から遠く離れた支援者にも、それぞれの体験にもとづいた「もうひとつのこの世」を幻視させ、彼らの倫理を起動させ、支援へとつき動かす力となった。一方で、患者らと基盤を共有しないがゆえの運動に伴う一定の限界はあった。しかし、それを超えて、患者らによって模索され、希求された「もうひとつのこの世」は「本願の会」の活動をとおして、問われ続けている。

すでに、近代に生きる我々の多くは、石牟礼や患者たちと共通の基盤を持ちえない。そのなかで、かつての支援者の限界と可能性を糧にしながら、いかにして、それぞれの場所からそれぞれの言葉で、「もうひとつのこの世」をとも幻視できるか。そして、石牟礼らの生きる風土のように、受難に立ち向かう倫理を生起させる基盤として、我々は、何を持ち得るのか。水俣の事例から問われているように思う。

参考文献

『石牟礼道子全集・不知火 全17巻・別巻』藤原書店、2004-2014年。

- 石牟礼道子「もうひとつのこの世へ(上)」水俣病裁判支援ニュース『告発』1970年6月25日号、所収：東京・水俣病を告発する会編『告発 縮刷版』1971年、98-99頁。
- 石牟礼道子「名残の世」吉本隆明・桶谷秀昭・石牟礼道子『親鸞 不知火よりのことづて』平凡社、1995年、129-182頁。
- 石牟礼道子・鶴見和子『〈鶴見和子・対話まんだら〉石牟礼道子の巻』藤原書店、2002年。
- 石牟礼道子『不知火—石牟礼道子のコスモロジー』藤原書店、2004年。
- 石牟礼道子・伊藤比呂美『死を想う われらも終には仏なり』平凡社新書、2007年。
- 岩岡中正『魂の道行き—石牟礼道子から始まる新しい近代』弦書房、2016年。
- 緒方正人語り／辻信一構成『常世の舟を漕ぎて—水俣病私史』世織書房、1996年。
- 緒方正人『チツソは私であった』葦書房、2001年。
- 緒方正人ほか「本願の会 座談会」『魂うつれ』2013年7月号、2-23頁。
- 萩原修子「語りえなさに耐える—宗教と倫理の回路」『宗教研究』第361号、2009年、289-312頁。
- 萩原修子「生み落とされることば、手渡されていくことば—水俣病事件と『本願の会』」『宗教研究』第373号、2012年、203-230頁。
- 水俣病センター相思社編『もう一つのこの世を目指して—水俣病センター相思社30年の記録』(財)水俣病センター相思社、2004年。
- 水俣病を告発する会「水俣病センター(仮称)をつくるために」水俣病裁判支援ニュース『告発』号外1972年10月15日、所収：東京・水俣病を告発する会編『告発 縮刷版 続編』1974年、143-146頁。
- 宗像巖「水俣の内的世界の構造と変容—茂道漁村への水俣病襲来の記録を中心として」色川大吉編『水俣の啓示(上)—不知火海総合調査報告』筑摩書房、1983年、91-154頁。
- 宗像巖「水俣問題に見る宗教」門脇佳吉・鶴見和子『日本人の宗教心』講談社、1983年、173-194頁。
- 宗像巖「討論・意識する宗教とは」門脇佳吉・鶴見和子『日本人の宗教心』講談社、1983年、195-212頁。
- エマニュエル・レヴィナス『困難な自由—ユダヤ教についての試論』内田樹訳、国文社、2008年。
- 吉井正澄『「じゃなかしゃば」新しい水俣』藤原書店、2016年。
- 渡辺京二『渡辺京二評論集成Ⅱ 新編小さきものの死』葦書房、2000年。
- 渡辺京二『もうひとつのこの世—石牟礼道子の宇宙』弦書房、2013年。

注

- 1) 石牟礼道子・鶴見和子『〈鶴見和子・対話まんだら〉石牟礼道子の巻』藤原書店、2002年、260-264頁を参照。
- 2) 石牟礼道子「もうひとつのこの世へ(上)」(水俣病裁判支援ニュース『告発』1970年6月25日号、所収：東京・水俣病を告発する会編『告発 縮刷版』1971年)、98-99頁を参照。
- 3) 石牟礼の初出は「もうひとつのこの世」と「ひとつ」がひらがなであるが、支援者や患者が用いる場合や、石牟礼の講演や対談記録などでは「もう一つのこの世」と漢字表記の場合もある。本稿では初出のひらがな表記を用いているが、引用では、原文にしたがっている。
- 4) 「水俣病センター(仮称)をつくるために」水俣病裁判支援ニュース『告発』号外1972年10月15日、所収：東京・水俣病を告発する会編『告発 縮刷版続編』1974年)、144頁を参照。
- 5) ただし、創価学会の係わりには言及している(全集15:527)。また、患者の中に既成の宗教の信者もいたが、石牟礼はそれ以上に、自然とのつながりに生きるその患者の資質を重視していたようだ。
- 6) 幼い頃から和讃に親しみ、仏教についての対談も多い。1984年には、熊本市の真宗寺で住職が起草すべき「表白」文を依頼され『花を奉るの辞』を書いた(全集別・渡辺:338)。
- 7) 石牟礼道子『アニマの鳥』(筑摩書房、1999年)は、原題『春の城』として1998年から1999年に新聞5紙に掲載された。『全集第13巻』所収。天草・島原の乱をテーマにしている。
- 8) 緒方正人『チツは私であった』(葦書房、2001年)、緒方正人語り／辻信一構成『常世の舟を漕ぎて—水俣病私史』(世織書房、1996年)に詳しい。これらの分析は拙稿「語りえなさに耐える—宗教と倫理の回路」(『宗教研究』第361号、2009年)、289-312頁を参照。
- 9) 萩原修子「生み落とされることば、手渡されていくことば—水俣病事件と『本願の会』」(『宗教研究』第373号、2012年)、203-230頁を参照。また、1994年に行政で初めて公式に謝罪した吉井正純元水俣市長は、「栄子人生哲学」と称して、杉本栄子の思想に大きな影響を受けている。吉井正純『「じゃなかしゃば」新しい水俣』藤原書店、2017年、128-135頁参照。
- 10) 渡辺によると、石牟礼は、裁判闘争から降りて、一人で行動するようになった患者・緒方正人の行く手に、新たな患者運動のよみがえりを見ていた(渡辺2013:126)と

いう。それが、「本願の会」につながる。

- 11) これらの分析は、注8の拙稿参照。
- 12) 緒方正人ほか「本願の会 座談会」『魂うつれ』2013年7月号、10頁。
- 13) 不知火海総合学術調査団は、石牟礼道子から懇請を受け、色川大吉を団長として、1976年に発足した。5年余りの調査結果は『水俣の啓示（上）—不知火海総合調査報告』筑摩書房1983年、『水俣の啓示（下）—不知火海総合調査報告』筑摩書房1983年となった。
- 14) 宗像巖「討論・意識する宗教とは」（門脇佳吉・鶴見和子『日本人の宗教心』講談社1983年）、202頁参照。また、宗像巖「水俣問題に見る宗教」（門脇佳吉・鶴見和子『日本人の宗教心』講談社、1983年）、173-194頁参照。宗像は、三層構造として漁民の世界観を分析した。「水俣の内的世界の構造と変容—茂道漁村への水俣病襲来の記録を中心として」（色川大吉編『水俣の啓示（上）—不知火海総合調査報告』筑摩書房1983年）91-154頁参照。石牟礼は、宗像の解釈に大変感謝していた。